

ニュージーランドの後期中等教育における 校内評価に関する研究

—スタンダードとパフォーマンス課題に注目して—

奥田久春

要 旨

本稿では、ニュージーランドの後期中等教育修了資格である NCEA (National Certificate for Educational Achievement) にて設定されている到達度スタンダードと校内評価の基準、それらに沿ったパフォーマンス課題、特に探究活動の一連の関係性を明らかにすることで、その特徴を考察する。

まず NCEA や校内評価の特徴を整理した上で、各科目に設定されている到達度スタンダードの教育目標の動詞を分類し、“demonstrate understanding” が最も多く用いられていることを分析していく。そして歴史と生物の教科を事例として、その教育目標を有する到達度スタンダードの評価基準を分析し、教育目標に副詞が段階ごとに加わることで、それぞれの基準が示されていること、また副詞が表す程度や範囲、量や質、また高次の能力によってその基準のエビデンスとなっていることを解き明かす。

この評価基準に基づいて構成されるパフォーマンス課題では、単に理解したことを述べればよいというものではなく、具体的問いと根拠のための情報収集などの探究活動が求められ、また探究活動であっても知識や概念の基本的な原理や重要性の認識、高次の能力を伴った理解力と説明力が求められることを明らかにする。

教員はこうした到達度スタンダードと評価基準に加え、『校内評価リソース』の「課題例」を参考にしてパフォーマンス課題を構成することができる。そのことで総括的評価としての公平性を確保することが期待されていることを読み解く。

これらの分析から、NCEA では到達度スタンダード、評価基準、パフォーマンス課題が一貫性を持ち、深みや幅を持つ授業を展開できる構造になっている点の特徴であることを考察した。

1. はじめに

本稿の目的は、ニュージーランドの後期中等教育修了資格である NCEA に着目し、その中で設定されているスタンダードと校内評価の基準、それらに沿った生徒のパフォーマンス課題との関係を探り、その特徴を考察することである。

ニュージーランドでは 2002 年より後期中等教育段階である 11 年生、12 年生、13 年生を対象に NCEA のレベル 1~3 の試験を実施している。その評価方法として外部の統一筆記試験によるもの(学外評価)と学校での学習の中で進めていく「課題」(task)に対して校内で評価するもの(校内評価)が併存して行われている。特に「課題」は生徒が何らかの形で取り組み、その成果を示すことで評価されるため、カリキュラム論で言われるパフォーマンス課題と捉えることができる。

この NCEA は単位を修得することで資格を取得できる。各教科にはレベル 1~3 の科目が用意されており、NCEA1 ではレベル 1~3 の科目から 80 単位、NCEA2 はレベル 2 以上の科目から 60 単位とレ

レベル1～3の科目を20単位、NCEA3はレベル3の科目から60単位とレベル2以上の科目から20単位を取得しなければならない。また、各科目には教育目標と達成水準を表現するスタンダードが複数設定されており、NCEAではこのスタンダードごとに単位を取得する仕組みとなっている。即ち科目を全習することで単位を取得するのではなく、科目内で求められる能力を表す個々のスタンダードを修得できれば、それぞれ単位が認定されるのである。これは筆記試験による学外評価においても同様であり、試験の設問ごとにスタンダードに対応する形となっている。校内評価ではパフォーマンス課題への評価によって単位認定が行われる。

NCEAでの評価は学習に繋げるための形成的評価ではなく、資格取得のための評価であり、総合的評価として行われる。このような制度はニュージーランドだけではなく、イングランドのGCE-Aレベルや、オーストラリアの中等教育修了資格で用いられる「学校に基礎を置く評価」(School based Assessment)、またマレーシアや香港など他国でも広く行われているものだが、ニュージーランドでは特にスタンダードに設定されているパフォーマンス課題が評価されるという点で特徴的である。このためNCEAを理解する上で、スタンダードからどのようなパフォーマンス課題が考えられ、どのような形で評価されるのかを明らかにすることが重要となると考えられる。

また、ニュージーランドでは学校での教育内容に関する様々な決定は各学校に権限があり、各教員の工夫によって何を教えるかを考え、授業を展開することが可能である。このため、NCEAで行われる校内評価のためのパフォーマンス課題も各学校の裁量で決めることが可能となっている。しかしながら、国家資格でもあるNCEAには統一的な質の保障や公平性が求められる。そのため一定の評価方法や規定が存在することとなる。そうした規定はどのようなもので、どのような形で教員の授業に影響を与えるものなのだろうか。

これまで日本において、ニュージーランドの教育制度や教育行政に関する研究は行われてきた。NCEAに関しては中村(2009)や高橋(2014)によって、その概要が明らかにされ、政策過程に関する研究も行われている。伊井(2021)や柿原(2021)もニュージーランドの教育を扱う中でNCEAを解説している。しかしながら、パフォーマンス課題やその校内評価のあり方に関する研究は見られない。拙稿(2020)においてもニュージーランドのNCEAを述べたが、その歴史的背景や制度を整理するに留まり、パフォーマンス課題についての詳細な分析までは踏み込んでいない。ニュージーランドにおいては、校内評価やスタンダード準拠評価としての特徴を論じる研究も行われている(Bolstad, R. and Gilbert, J., 2008, Hall C., 2005, Hipkins, R., Johnston, M. and Sheehan, M., 2016)が、スタンダードと評価基準、パフォーマンス課題の関係という視点でNCEAを特徴づける研究は管見の限り見られない。

本稿では、まずニュージーランドの教育制度を改めて概観し、ナショナル・カリキュラムとNCEA、また校内評価の位置づけを整理する。その上でNCEAを管理するNZQA(New Zealand Qualification Authority)が設定しているスタンダードの特徴を分析する。その際に教育目標の動詞に注目し、その動詞によってパフォーマンス課題がどのように規定されるのかについて考察する。またNZQAによるスタンダードに関する記述や教育省が示している『校内評価リソース』から、評価基準とパフォーマンス課題との関係を分析していく。また、スタンダードや評価基準がどのように教員の評価の公平性や信頼性を確保するのかを探り、最後にこれらを踏まえたNCEAの特徴を考察する。

2. ニュージーランドの教育制度とNCEA

ニュージーランドの教育制度は主に8年間の初等教育と5年間の中等教育から構成されている。小

学校が6年生までの場合は2年間の中間学校で学んでから中等学校に入学する。中等教育のうち11年生からが後期中等教育と位置づけられる。NCEAが11年生から対象となるのはそのためである。

先述のようにニュージーランドでは、教育に関する権限が各学校の学校理事会（Board of Trustees: BOT）に委ねられ、カリキュラムに関する事項も大幅な権限が付与されている。しかしながら、まったく自由というわけではない。ナショナル・カリキュラムにあたるニュージーランド・カリキュラムが2007年に策定され、8つの学習領域、5つのキー・コンピテンシー、価値などが設定されており、学習領域にはキー・コンピテンシーや価値を包含した「到達目標」（Achievement Objectives）が8つの学習段階ごとに用意されているからである。この「到達目標」は教育内容を含めて、目標を示したものである。これらに基づきながら、各学校がカリキュラムを開発、編成することとなっている。

11年生からはNCEAのための授業が行われることとなり、ニュージーランド・カリキュラムに基づきつつ、NZQAが設定している教科ごとのスタンダードに沿った授業を行っていく。またニュージーランド・カリキュラムと異なり、NCEAでは明確に教科とレベル1～3の科目が設定される。教科の種類は表1のとおりで、65教科が用意されており（但し、マオリ語版として同一教科であったり、教科名が異なるが重複したりする教科もある）、それぞれにレベル1～3の科目が含まれる。

各科目に複数のスタンダードが設定されており、それぞれのスタンダードに単位が付随している。スタンダードとは、例えば「○○の調査を実施する」「○○を分析する」といったように行動を表現することで、その能力を有するという教育目標と達成水準を表しているものである。従って、教えるべき教育内容が先にあって、そのあとに教育目標が示されるのではなく、スタンダードに基づいた逆向きの設計によって授業づくりが行われる。

表1. NZQAにより設定されているNCEAの教科

Accounting, Adult Education, Agricultural and Horticultural Science, Agribusiness (Business Studies), Art History, Biology, Business & Management, Business Studies, Chemistry, Chinese, Classical Studies, Cook Islands Māori, Computing, Core Skills, Dance, Design & Visual Communication, Digital Technologies, Drama, Driver License (Class 1), Early Childhood Education, Earth and Space Science, Economics, Education for Sustainability, English, English for Academic Purposes, English Language (EL), Field Māori, French, Geography, German, Hangarau, Hauora, Health, History, Home Economics, Japanese, Korean, Latin, Legal Studies, Lea Faka-Tonga, Mathematics and Statistics, Media Studies, Māori Performing Arts, Music, New Zealand Sign Language, Ngā Toi, Pacific Studies, Pāngarau, Physical Education, Physics, Psychology, Pūtaiao, Religious Studies, Samoan, Science, Social Studies, Sociology, Spanish, Supported Learning, Te Reo Māori, Te Reo Rangatira, Technology, Tikanga-ā-Iwi, Vagahau Niue, Visual Arts

出所：NZQAのHPをもとに筆者作成（太字は筆者、後述）

ニュージーランドのスタンダードには単元スタンダード（Unit Standard）と到達度スタンダード（Achievement Standard）の2種類がある。単元スタンダードとは達成できたか、達成できなかったかのみで評価されるコンピテンシー型のスタンダードである。

もともとニュージーランドでは、1970年代に中等教育への進級率が上昇するなかで、大学進学を希望しない生徒の資格取得の機会を設けるために、校内評価が導入されてきた（Elley W. B. and Livingstone, I. D., 1972）。やがて、誰もが到達度に達していれば評価されるスタンダード準拠評価が求められ、校内評価を通してスタンダードごとに単位が取得できる仕組みとなってきた。当初は単元スタンダードが想定されていたものの、NCEA導入にあたっては、学術的な分野において低次から高次へと達成水準を区分することが求められたことから、到達度スタンダードも設けられるようになった（Hipkins,

R., Johnston, M. and Sheehan, M., 2016)。また、2007年のニュージーランド・カリキュラムの策定以降は、先述の学習領域に繋がるものとして到達度スタンダードが位置づけられるようになった。

各科目には単元スタンダードのみが設定されているものもあれば、到達度スタンダードのみの科目、或いは両方を有している科目がある。表1で太字で示したのが到達度スタンダードを有する教科であり、ほとんどの教科を占めていることが分かる。

3. NCEAの到達度スタンダードの構造

到達度スタンダードの達成水準は4段階(grade)の基準(criteria)で区分されており、それぞれ Not Achieved (不合格)、Achieved、Merit、Excellenceである。

本稿では、校内評価の基準を探るために、到達度スタンダードを取り上げていきたい。また、各科目で示される到達度スタンダードの事例としてレベル1の歴史とレベル2の生物を取り上げる(表2-1、2-2)。

それぞれの到達度スタンダードには評価方法と単位が設定されている。各表からは、それぞれ行動を示す動詞で終わる文章となっていることが分かる。この動詞が示す内容が教育目標となる。

表 2-1. 歴史レベル1 到達度スタンダードと評価方法

到達度スタンダード	評価方法	単位
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所の調査を実施する	校内評価	4
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について理解していることを示す	校内評価	4
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事の史料を解釈する	学外評価	4
ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事について人々の異なる観点について理解していることを示す	校内評価	4
歴史的な出来事の因果関係を述べる	学外評価	4
重要な歴史的な出来事がどのようにニュージーランド社会に影響を与えたかを述べる	学外評価	4

出所：NZQA の HP から各科目のスタンダードの内容をもとに筆者作成

表 2-2. 生物レベル2 到達度スタンダードと評価方法

到達度スタンダード	評価方法	単位
指導を受けながら、生物学の文脈で実習調査を実施する	校内評価	4
公表されている情報の生物学的妥当性を分析する	校内評価	3
植物や動物の生活様式の適応について理解していることを示す	校内評価	3
細胞レベルでの生命過程を理解していることを示す	学外評価	4
遺伝変異や変化を理解していることを示す	学外評価	4
指導を受けながら、生態群集のパターンを調査する	校内評価	4
遺伝子発現を理解していることを示す	学外評価	4
顕微鏡レベルで生体物質を調査する	校内評価	3

出所：同上

表 3. 到達度スタンダードで用いられている教育目標を表す動詞

analyze, apply, carry out an investigation, carry out an inquiry, choreograph, clarify, communicate, compare, complete a media product, complete documents, compose, conduct, conduct an experiment, conduct inquiry, conduct research, construct and deliver, construct, create, create and deliver, decide, demonstrate and show understanding, demonstrate ensemble, demonstrate knowledge, demonstrate management strategies and describe, demonstrate movement, demonstrate performance, demonstrate responsibility, demonstrate skills, demonstrate strategies, demonstrate understanding, describe, design, design a questionnaire, develop, devise, devise and perform, direct, discuss, draft, establish, evaluate, examine, explain, explore, express, form, give a presentation, implement an action plan, implement procedures, inform, initiate, integrate, interact, interpret, invest, investigate, lead, listen, make a decision, make adaptation, participate, perform, prepare, present, process, produce, promote, provide an interpretation, read, report, research, research and report, resolve, respond, script, select and use, show, sign, take action, talk, tell, translate, undertake, undertake an action, undertake development, undertake management, use, write

出所：NZQA の HP に掲載されている全ての到達度スタンダードから筆者が抽出、作成

また、これらスタンダードの文章は、先述の「到達目標」に対応させて、ある程度の教育内容が示されている。ただ、教育目標の動詞が示すように、その内容をどの程度活用することができるかが評価されるのである。

では、NCEA 全体においてどのような教育目標の動詞が使われているのだろうか。各科目の到達度スタンダードの教育目標を分類すると、表 3 の結果が得られた。これは動詞と目的語の熟語の扱いによっても分類方法は異なってくる（例えば、“carry out an investigation” など）が、本稿では、一部の熟語を除き動詞の提示に留めておきたい。

これらの中で最も多く使用されている動詞を計算すると、“demonstrate understanding” であった。特に学外評価において最も多く用いられている。全ての到達度スタンダードが 961 個あり、その中でも学外評価の到達度スタンダードは 301 個あるが、過半数の 167 個のスタンダードにおいて “demonstrate understanding” が用いられていた。また、校内評価の場合、660 個の到達度スタンダードがあることから多様な教育目標による評価を可能にしているといえるが、それでも 120 個で “demonstrate understanding” を評価の対象としている。

本稿では学外評価でも校内評価でも多く用いられている “demonstrate understanding” を用いた到達度スタンダードを取り上げていきたい。この教育目標には二つの動詞が含まれており、そのことで「理解している」という習得と、それを「示す」という活用を行うパフォーマンス課題が考えられ、分析の幅を広げるからである。

4. NCEA の到達度スタンダードの評価基準とパフォーマンス課題

この “demonstrate understanding” を用いた到達度スタンダードでは、どのような評価が行われるのかわを見ていきたい。先述のように到達度スタンダードでは統一的に 4 段階で評価されるため、不合格を除いた 3 段階の評価基準が設けられている。それぞれの段階を示す方法は科目（レベル 1～3）に関わらず、教科によってある程度の特徴がみられる。例えば社会科学系や理科系教科では全ての到達度スタンダードにおいて次の特徴がある。

- ・ Achieved：到達度スタンダードの表記のまま
- ・ Merit：“in-depth”（深く）という副詞（或いは名詞を伴う形容詞として）が付加
- ・ Excellence：“comprehensively” という副詞（或いは名詞を伴う形容詞として）が付加

数学・統計の教科では、Merit の場合は “using relational thinking”、Excellence の場合は “using extended abstract thinking” といった表現が付け加わる。言語系の教科の場合は、Merit だと “clear”、Excellence だと “thorough” が加わることが多い。芸術系や技術系の教科の場合、使い方は多様だが、概ね “convincingly” “perceptively” “critically” “effectively” “efficiently” “skillfully” などの単語が用いられる傾向がある。

本稿では、「深く」、「包括的」という評価基準を用いている社会科学系の歴史と理科系の生物を事例に取り上げ、具体的にどのようにすれば「深く」、「包括的」なものとして評価されるのかを明らかにしていきたい。本稿では前掲と同様に歴史レベル 1 と生物レベル 2 から “demonstrate understanding” が目標となっている到達度スタンダードを取り上げてみる（表 4-1、4-2）。

表 4-1. 歴史レベル 1 到達度スタンダードの基準とエビデンス

	Achievement	Merit	Excellence
スタンダード	ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所* について理解していることを示す。	ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について深く理解していることを示す。	ニュージーランド人に重要な歴史的な出来事や場所について 包括的に 理解していることを示す。
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的な出来事や場所を述べる (describe)。 裏付けとなる根拠を用いて、調査の結果から分かったことを自分の言葉で伝える (communicate)。 	裏付けとなる重要な根拠をしっかりと (thorough) 理解し用いることが含まれる。	出来事、関係者、ニュージーランド人にとっての重要性が繋がっていることを示すために、裏付けとなる 広範な根拠 を用いる理解の深さと幅が含まれる。

*歴史的な出来事や場所についての定義もなされているが、本稿では省略する。

出所：NZQA 「歴史レベル 1 到達度スタンダード」より筆者訳（太字は筆者）

表 4-2. 生物レベル 2 到達度スタンダードの基準とエビデンス

	Achievement	Merit	Excellence
スタンダード	植物や動物の生活様式の適応について理解していることを示す。	植物や動物の生活様式の適応について深く理解していることを示す。	植物や動物の生活様式の適応について 包括的に 理解していることを示す。
特記事項	適応について述べ、生息地で生残するために各生命体とその生命過程の営みを可能にする適応の場面を特定 (identify) することが含まれる。	各生命体が生息地で生残するために、どのように、 なぜ 適応によってその生命過程を営むことが可能になるのかを説明する、 生物学的理由を提示 することが含まれる。	いくつかの 生物学的見解を関連させる ことで理解を示すことが含まれる。そのために 正当化、評価、比較、対比、分析 を行い、選択した文脈に即して 2 つのポイント* を考慮しなければならない。

*分類学や機能上で異なる生物群から一つまたは複数の植物がいる環境で適応が異なる点。

出所：NZQA 「生物レベル 2 到達度スタンダード」より筆者訳（太字は筆者）

各表は NZQA によるそれぞれの到達度スタンダードの記述だが、3 段階の基準と特記事項が示されている。教員はこの内容に基づいてパフォーマンス課題を用意し、生徒の成果を評価することとなる。太字にした点はその基準のエビデンスになる事柄である。

Achieved から Merit に進むには「述べる」(describe) だけでなく、「根拠をしっかりと理解して用いる」ことや、「なぜ」や「どのように」という問いに対して説明できること、更に学問的な理解が求められている。また、Merit の「深く」と Excellence の「包括的」の差は「重要な」だけでなく「広範な」根拠を提示することや、要素の繋がりや見解の関連付けをすること、多様な文脈の理解、分析などといった高次な能力が必要になっている。

次に、到達度スタンダードに基づいて、どのようなパフォーマンス課題が想定されるのだろうか。これについては教育省が各科目のスタンダードごとに『校内評価リソース』を出しており、「課題例」(サンプル) を提示している。ここでも歴史レベル 1 と生物レベル 2 を取り上げ、「課題例」を見ていきたい。それぞれの到達度スタンダードには 2 つの「課題例」が用意されている(表 4-1 には表 5-1 と 5-2、表 4-2 には表 5-3 と 5-4 が対応)。

歴史レベル 1 の「課題例」①(表 5-1) では、教員が提示する 20 世紀のニュージーランドの出来事(本稿では省略するが「課題例」に例示) から、生徒が出来事を選択し、用意された具体的問いに当てはめ、答えの根拠となる情報収集を行う。情報源を記録しながら関連する根拠を特定、整理して、最終的にその出来事がニュージーランド人にとって重要であるということに結びつけた説明を行うためのポスターを作成する。単に出来事について理解しているだけでなく、根拠となる情報を収集するこ

表 5-1. 歴史レベル 1 「課題例」① タイトル：20 世紀の 10 年間の重要な出来事

出来事を選択する
調査する出来事を選択する。選択した出来事が、この課題を遂行するための十分な根拠を提供するかを確認する。収集する根拠は、次の具体的問いに関連させる必要がある。 1. その出来事の背景は何だったか。 2. その出来事の中で何が起こったか？ 3. その出来事は人々の生活にどのような影響を与えたか？
可能な情報源を特定する
具体的問いの答えに繋がる情報を収集するために、多くの情報源をあたる。情報源には文献や視覚情報を含む。どのようにすれば、情報源のそれぞれが調査に役立つと考えるか述べる。
関連する根拠を選択して整理する。特定の可能性のある情報源のうち少なくとも 4 つから、具体的問いに関連する一連の根拠を選択し、どの根拠がどの具体的問いに関連しているかを示す。 選択した根拠を明確かつ論理的な方法で整理し、注釈を付す。
情報源を記録する
選択した各根拠の上部に、情報源の詳細を正確に記録する。
調査プロセスを評価する
調査プロセスに評価を行う。クラスでこの課題を行う際には、根拠フォルダーを使用できる。
出来事についての理解を示す。
収集して選択した根拠を用いて、出来事とその効果、ニュージーランド人にとってどのように重要なかを説明するポスターを作成する。理解していることを裏付ける広範な根拠を用いること。

出所：NZ Ministry of Education, Achievement Standard, History 1.2B より筆者抄訳

表 5-2. 歴史レベル 1 「課題例」 ②タイトル：イスラエル・パレスチナの対立とグローバルの影響

プレゼンテーションを作成する（次の内容を理解していることを示す）
<ul style="list-style-type: none"> ・イスラエルとパレスチナの紛争の歴史が世界の安全保障にどのように影響したか ・イスラエルとパレスチナの状況と世界の安全保障がニュージーランド人にとってどのように重要か
<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションで考慮すること
<ul style="list-style-type: none"> ・1967 年以降、イスラエル人入植者やヨルダン川西岸のイスラエル国がとった行動がパレスチナ人に与えた影響（主にパレスチナ人の視点にも目を向ける） ・1967 年以降、ヨルダン川西岸やイスラエルで一部のパレスチナ人が行った行動がイスラエル人に与えた影響（主にイスラエルの視点でも見る） ・これらの行動に対する西側や中東の指導者の反応 ・これらの行動に対する「テロ組織」の対応 ・「テロ組織」の行動に対する西側の指導者の反応 ・「テロ組織」の行動や次のような西側の指導者の対応について、ニュージーランド人にとっての重要性 <ul style="list-style-type: none"> - ニュージーランド軍のアフガニスタンへの派遣 - 安全な旅行のための要件の増加 - 2007 年の Tuho の人々の警察による襲撃との比較

出所：NZ Ministry of Education, Achievement Standard, History 1.2A より筆者抄訳

表 5-3. 生物レベル 2 「課題例」 ①タイトル：鳥と蜂と花と木など

分類学上の 3 種類の植物群での植物の生殖に関する適応や、それによってどのように、なぜ生息地での生存を可能になるのかについてのレポートを作成する。収集した生物学的情報のポートフォリオを用いて、裏付けとなる根拠を示す。
<ul style="list-style-type: none"> ・調査した 3 種類の植物群に名前を付け、それぞれの生態学的な特徴、物理的な生息地、他の生物との関係を簡単に説明する。 ・各群の植物の生殖を可能にする構造や行動、生理学的適応について説明する。注釈付きの図を用いてもよい。 ・これらの適応により、各群の植物が正常に繁殖できる方法や理由を説明し、裏付ける例を提示すること。 ・3 種類の植物群間で植物の生殖過程と適応を比較し、生殖の多様性について話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> - 議論では生息地でうまく生存する植物群全体の多様な適応を比較することで、いくつかの生物学的見解を関連させること。 - 3 種類の植物群間で生殖のプロセスの特徴の利点や限界の例を含めること。 ・答えを裏付けるために注釈付きの図を用いてもよい。
完成したレポートとともにポートフォリオを教員に提出すること。

出所：NZ Ministry of Education, Achievement Standard, Biology 2.3A より筆者抄訳

とで更に理解を深めなければならない。そしてニュージーランド人にとって重要であるということに結び付けるための広範な理解力と説明力が求められることとなる。

歴史レベル 1 の「課題例」②（表 5-2）では、テーマと具体的問いが用意されており、「課題例」①と同様の探究活動を行った上で、考慮すべき内容を説明するための広範な根拠を用いてプレゼンテーションを行うこととなっている。つまり世界の出来事がニュージーランドに繋がっていることを説明するために、出来事の本質を理解した説明力が求められる。

生物レベル 2 の「課題例」（表 5-3、5-4）では、いずれもレポートを作成することとなっているが、植物や動物の適応に関する原理や過程を理解したうえで「どのように」「なぜ」という具体的問いに答えるための情報収集を行い、情報源のポートフォリオを作成して根拠を提示しつつ、説明を行うこと

表 5-4. 生物レベル 2 「課題例」 ②タイトル：～についての内と外界と周囲

<p>2種類の哺乳類のガス交換と体内での輸送に関する適応についてのレポートを作成し、適応によって生息地で生存することについて、どのように、なぜ可能になるかを示す。収集した生物学的情報のポートフォリオを使用して、裏付けとなる根拠を提示する。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・調査した2種類の哺乳類に名前を付け、物理的な生息地、他の生物との関係など生態学的特徴を簡単に説明する。 ・各哺乳類がガス交換と体内の輸送を可能にする構造、行動や生理学的適応を説明する。 ・これらの適応により、各哺乳類が生息地で生存するためのガス交換と体内での輸送の方法や理由を説明する。説明を裏付ける例を提示すること。 ・ガス交換と体内の輸送のための適応が各哺乳類でどのように関連しているかを話し合う。議論では、適応によって、どのように次のことが起こるのかを示すために、いくつかの生物学的見解を関連させ、そうした例を含めること。 <ul style="list-style-type: none"> - 各哺乳類の生命過程の有効性を高めること - 各哺乳類内での適応プロセスの特徴の利点と限界 ・答えを裏付けるために注釈付きの図を用いてもよい。
<p>完成したレポートとともにポートフォリオを教員に提出すること。</p>

出所：NZ Ministry of Education, Achievement Standard, Biology 2.3B より筆者抄訳

となっている。注釈付きの図を用いるなど、言葉だけではない説明も可能である。

このように歴史においても生物でも理解したことを述べたり、調べたことを発表したりするだけでなく、具体的問いに対する答えの根拠のための情報収集を行う探究活動になっている。そして探究活動を通して理解力や説明力が求められることになることが分かる。

このようにして行われるパフォーマンス課題や探究活動は、生徒の学習を形成していくための評価ではなく、総括的な評価の対象となる。教員による指導の力量、時間や授業環境に差があっては公正さや信頼性に欠けることとなる。

そのため、これらの「課題例」には、テーマそのものや扱う時代、場所、対象となる生物などの事例やその範囲、使用できる資料や情報源などのリスト、求められる授業環境が示されている。これらを参考にしながら、NZQA の示すスタンダードの評価基準に沿って授業に落とし込んでいくのである。また「課題例」には生徒による説明や根拠の想定例が評価基準ごとに示されており、評価のモデレーションとしても活用される。

但し、この「課題例」のとおり画一的な授業を行うことは推奨されておらず、参考にしながらも各教員が学校や生徒の状況から授業づくりを行うことが可能となっている。

5. おわりに

本稿では到達度スタンダードと校内評価の基準を分析し、想定されるパフォーマンス課題の内容を探ることで、それらの関係性を明らかにしてきた。

まず、到達度スタンダードに含まれる教育目標を土台として、「深く」や「包括的に」といった副詞が加わることで評価基準が規定される。それら副詞の程度を示すエビデンスとして「述べること」「説明する」などの行動や「重要な」、「広範な」といった質や量の程度や範囲、また見解や要素を「関連付け」する能力といった差異が設けられている。こうした差異を綿密に盛り込んだ形でパフォーマンス課題が設定される。つまり、パフォーマンス課題としての活動が先にあるのではなく、明示された

到達度スタンダードの教育目標に達をするために、教員がパフォーマンス課題を構成するという仕組みであった。そして、こうした構造によって、校内における総括的評価の対象としてのパフォーマンス課題が可能になっていた。

また、到達度スタンダードで多く用いられている“demonstrate understanding”という教育目標であっても、単に理解したことを述べればよいというものではなく、一連の探究活動が求められた。一方で、探究活動であっても調べたことを説明すればよいというものではなく、基本的な原理や重要性の認識、高次の能力を伴った理解力と説明力が求められるものであることも解明できた。

このように、到達度スタンダード、評価基準、パフォーマンス課題が一貫性をもち、深みや幅を持つ授業へと展開できる構造になっているのが NCEA の特徴だといえよう。

本稿では、一つの教育目標に絞り、また教科も歴史と生物に限った。今後は本稿で明らかにしたことを踏まえて、NCEA のパフォーマンス課題と評価方法を読み解く枠組みを考察し、他の教科や教育目標の動詞をもつスタンダード、評価基準を表す副詞にも目を向けて分析していくことや、実際の学校現場での教員の取り組みの課題について調査を行うことで、NCEA の校内評価の全体的な特徴を明らかにするよう、研究の幅を広げていくことが求められる。

*本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号 20K02605）の研究成果の一部である。

主要参考文献

- Elley W. B. and Livingstone, I. D. (1972) External Examinations and Internal Assessments Alternative Plans for Reform, NZCER.
- Bolstad, R. and Gilbert, J. (2008) Disciplining and drafting, or 21st century learning? NZCER Press.
- Hall C. (2005) The National Certificate of Educational Achievement (NCEA), Is there a Third Way? Codd J., and Sullivan K., Education Policy Directions in Aotearoa New Zealand, Thomson Dunmore Press, pp. 235-265.
- Hipkins, R., Johnston, M. and Sheehan, M. (2016) NCEA in Context, NZCER Press.
- New Zealand Ministry of Education (2017) Internal assessment resource Biology 2.3A v3 for Achievement Standard 91155.
- New Zealand Ministry of Education (2017) Internal assessment resource Biology 2.3B v3 for Achievement Standard 91155.
- New Zealand Ministry of Education (2015) Internal assessment resource History 1.1B v3 and 1.2B v3 for Achievement Standard 91001 and 91002.
- New Zealand Ministry of Education (2015) Internal assessment resource History 1.2A v3 for Achievement Standard 91002.
- Openshaw, R. (2009) Reforming New Zealand Secondary Education, Palgrave macmillan.
- Vallender G. (2009) External Examinations Beyond National Borders: New Zealand and the Cambridge International Examinations, Vlaardingerbroek B. and Taylor N. eds, Secondary School External Examination Systems, Cambria Press, pp.291-302.
- 伊井義人 (2021) 「ニュージーランド 多様性と公正さを大切にする教育」大塚豊監修, 日暮トモ子編『アジア教育情報シリーズ1巻 東アジア・大洋州編』一藝社, 115-129 頁.
- 奥田久春 (2020) 「ニュージーランドにおける後期中等教育試験と校内評価に関する研究」三重大学教養教育院研究紀要, 5 巻.
- 柿原豪 (2021) 『外国につながる児童生徒の教育と社会的包摂』春風社.

- 高橋望 (2014) 「ニュージーランドの学校教育カリキュラムに関する考察」『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』63, pp.181-190.
- 中村浩子 (2009) 「後期中等教育段階の統一資格制度改革をめぐるポリシークス：ニュージーランドのNCEA (National Certificate of Educational Achievement) を事例に」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23(1), pp. 63-79.
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治編 (2017) 『新しい教育評価入門』有斐閣.

(インターネットによるもの)

New Zealand Ministry of Education のNCEA や校内評価リソースに関しては, <https://seniorsecondary.tki.org.nz/> 2021/11/27 最終確認.

New Zealand Qualification Authority による各教科およびスタンダードについては, <https://www.nzqa.govt.nz/ncea/subjects/> 2021/11/27 最終確認.

A Study on Internal Assessment for Senior Secondary Education in New Zealand

— Focusing on the NCEA Standard and its Performance Task —

Hisaharu OKUDA

Abstract

The purpose of this study is to explain the feature of National Certificate for Educational Achievement (NCEA) focusing on the Achievement Standard, the assessment criteria, and the performance task in New Zealand secondary education. This study analyzes the verbs of the educational objectives used in the NCEA Achievement Standards set for each subject and finds that the verb, “demonstrate understanding”, is most often used. The three kinds of grading in the Achievement Standard, Achieved, Merit and Excellence, are defined by adding adverbs to the verbs in the assessment criteria, with evidences of a degree and range of quantity and quality of understanding, and higher-order capability that students would be expected to show.

In the performance task based on the assessment criteria, students are expected to demonstrate understanding of principles and higher-order capabilities. Hence it is not enough for students to simply describe what they understand. This performance task is conducted through an inquiry learning activity which includes focused questions and collecting information as evidence. Teachers can organize performance tasks by referring to the assessment criteria in these Achievement Standards and the “Internal Assessment Resources” set by the Ministry of Education and New Zealand Qualification Authority (NZQA). This system ensures fairness and reliability in a high stakes comprehensive assessment in the secondary school.

Finally, this study concludes that NCEA is characterized by the cohesive structure of its Achievement Standard, assessment criteria, and performance task. Such a structure allows for the development of courses which encourage deep and extensive learning.